

言語活動をとおりて科学的社會認識を育てる授業研究

I 主題設定の理由

社会認識とは社会の事象・事物の本質を客観的に把握することである。社会を「科学的」に認識するとは、社会科の教科としての性格に関わる基本的問題であり、立場によって論が分かれているが、大きく3つの流れがあるとされる。

①社会科で目標とされる社会の「科学的」認識は、具体的には「事象や出来事の社会的意味を正しく理解する」ことである立場。

②「実生活で直面する具体的問題を解決する」ことであるとする立場

③社会的事象を科学的に認識する立場（森分孝治著「社会科授業構成の理論と方法」：明治図書）

本部会では、上記の3つの流れをもとにしながら、子ども達に「科学的社会認識」を育成することめざして授業研究を進めてきている。

II 研究の内容

1 研究の柱

- (1) どのような社会事象を子ども達に提示するのか、基礎・基本の定着をどう進めるのか。
- (2) 子ども達が事実認識や事象間の関係把握、事象の持つ社会的意味の考察などを進めるときに教師はどのような指導や支援を行ったらよいか（発問や板書、資料の提示・活用等）
- (3) 子ども達一人一人の社会認識の深まりをどのように見取るか（学習の評価）、教師の授業のふり返り（子どもたち一人一人の社会認識を育てる授業だったか）をどのように行うか（授業の評価）
- (4) 子ども達一人一人に社会科のもつ面白さや楽しさを味わわせる授業をどのように創造するか。

2 研究の方法

- (1) 授業実践研究（日下部小 5年 橋本尚一教諭 2月）
「森林とわたしたちの暮らし」
- (2) 教材研究・情報交換
- (3) 臨地研修 クリーンピア甲府・峡東（甲府・峡東ごみ処理組合）

III 成果と課題

1 成果

- (1) 部会の中で資料を共有して授業に生かすことが、今回の授業研の折に実践できたのは良かった。今後も授業で生かせる資料づくりをしていきたい。
- (2) 各校から実践的な資料や授業案が提案され有意義であった。
- (3) 授業研究において、指導計画の随所に研究の柱に基づいた内容が配置されていた。「科学的社会認識を育てる」というテーマにせまることができた。
- (4) 臨地研修で新たな資料を見つけることができた。社会科の学習指導をしていく上で役立つことであり、今後も続けていきたい。
- (5) 小中の交流は発達段階に即した授業のあり方をお互いに知り、理解するという意味で有益であった。

2 課題

- (1) 社会科における言語活動はどのようなものか、さらに研究を深めていく。
- (2) 地域資料を含め、資料の発掘や活用方法について研究を進める。
- (3) 授業研究が2年続けて同じ学年の同じ単元の内容となった。部員の構成上しかたがないときは、授業研究の時期をずらすなど工夫をしていきたい。
- (4) 新学習指導要領に向けて、社会科として児童に身に付けさせたい力を明らかにし、それに向けた研究も必要となる。

（小学校部長 伊藤淳司 井尻小学校）

「科学的社會認識を育てる授業研究」～身近な資料を用いた授業研究～

I 主題設定の理由

科学的社會認識の過程においては、事実認識・関係認識・主体認識の3つがある。この主題のもと、授業研究の実施、臨地研修、学習会、各自の授業実践の報告、情報交換等、これまでの研究を継承する形で進めてきた。科学的社會認識を獲得するために必要な方法を研究することにより、次のような生徒の育成につながるものと考え研究を進めてきた。

- ① 学習課題に主体的に向き合える生徒
- ② 追究すべき課題を明確にとらえることのできる生徒
- ③ 自ら、また他者と協力して考えを深め、客観的な判断を下すことのできる生徒
- ④ 出した結論を様々な資料や他者の意見を参考にしながら検証できる生徒

生徒にとって身近な資料を活用することは、「その結果」を導き出す際の大きな手がかりとなるはずであり、それは科学的社會認識を育てるための一つの手段ともなるのだと考えた。「見通し」と「振り返り」を重視し、学びの繋がりを実感できる授業づくりも模索し、研究を進めてきた。

II 研究内容

(1) 授業研究の実施

深澤 歩未 教諭 (塩山中)

中学2年生 地理的分野 題材：「北方領土は日本とロシアどちらの領土なのだろうか」

(2) 臨地研修… 8月：湯の奥金山博物館・木喰の里微笑館 (身延町)

11月：大善寺・勝沼氏館跡・日川水制群 (甲州市勝沼町)

(3) 各自の授業実践の報告 ※授業研究に向けて一人一実践を持ち寄り、指導案の検討を行った。

(4) 学習会…「和歌刻書土器について」 (甲州市文化財課担当 様, 釈迦堂遺跡博物館)

「ルワンダに見る国際理解」「北方領土問題」義務教育課指導主事 佐藤 雄二先生)

(5) 情報交換

III 成果と課題

○身近な地域の資料を活用するために臨地研修が大いに役立ち、学習会で取り上げたテーマも充実できていた。

○授業研究・臨地研修・学習会を通して、研究テーマに基づいた研究成果をあげることができた。

○統一授業研で扱う単元について、部会員全員が授業案を持ち寄り授業づくりの方向性を話し合い、それをもとに授業者が提案した実際の授業案について組織全体で検討し、研究授業を実践できた。

○小中連携のとりくみとして、両方の授業を見ることで学ぶことが多かった。小学校の授業内容や進め方、言語活動における児童の実態など知っておくべきことがたくさんあることを感じた。

○臨地研修については、講師を招いて解説していただくことで、個人的に見学しただけでは気づけないようなことについても深く知ることができ、有意義な研修となった。

●教協のスローガンに沿い、臨地研修・学習会・授業研究につながりを持たせて計画を立てたい。

●新指導要領での小～中の教育課程を継続的なものにしていくような研究も進めていく必要がある。

(中学校部長 宮下智英 勝沼中)